

境への放出量に関するデータを提供し、環境リスクの把握に大きく寄与するものである点が高く評価されました。なお、本研究は仲山慶講師指導の下、国立環境研究所との共同研究で実施されたものです。

優秀ポスター賞受賞報告

辻沢雄将(化学汚染・毒性解析部門 大学院農学研究科2年生)

平成26年12月9~10日に東京大学本郷キャンパスにて開催された「環境ホルモン学会(日本内分泌攪乱化学物質学会)第17回研究発表会」において、優秀ポスター賞を受賞することができました。本学会はビスフェノールA(BPA)やポリ塩化ビフェニル(PCBs)に代表される内分泌かく乱物質(環境ホルモン)の影響や技術についての情報交換、成果の発表を目的としており、我々のような環境化学分野をはじめ、遺伝学、分子生物学、医学など様々な分野の研究者が参加する学会です。第17回研究発表会では、①子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)、②ネオニコチノイド系農薬の毒性、③福島第一原子力発電所事故による野生生物への影響についてシンポジウムが開かれ、それに関連する多くの研究が発表されました。CMESからは教員・研究員・学生の計8名が参加し、陸棲・海棲哺乳類を対象としたBPA類・PCBs類の体内動態や曝露影響の解明、東日本大震災における化学物質の流出量推定など、社会的・学術的に関心の高い研究成果が報告されました。

筆者は「ニホンザルにおける水酸化PCBsの蓄積特性：胎盤を介した胎仔への移行」というタイトルでポスター発表を行い、優秀ポスター賞を受賞することができました。これは今年度から設立された賞で、満40歳未満の若手研究者に贈られます。本研究ではヒトと同じ霊長類であるニホンザル母仔を対象に、PCBsおよび水酸化代謝物(OH-PCBs)の体内動態と胎盤を介した母子間移行に注目しました。研究の結果、PCBsの母体血中濃度が低いニホンザルにおいても、初期発達段階の胎仔からOH-PCBsを検出しました。これらの結果は、母体血中濃度がニホンザルよりも高いヒトにおいて、より高濃度のOH-PCBsが胎児へ移行していることを示唆します。近年OH-PCBsはADHDをはじめとした、ヒトの発達障害増加に関する原因物質の一つとして疑われているため、とくに医学・疫学の研究者の方々

から貴重なご意見を頂くことができました。普段ディスカッションすることの少ない医学者・生化学者の方々と意見交換ができたことは、自身の研究をまとめる上で非常に良い刺激となりました。



編集後記

平成26年10月から沿岸環境科学研究センター環境動態解析部門に郭新宇教授が着任しました。郭教授の自己紹介記事を掲載しています。また、平成26年度新規採択課題の研究内容を2件、所属学生の学会での活躍等を紹介しています。

(CMES広報委員/生態系解析部門 講師 横川 太一)

CMESニュースNo. 31

平成27年2月14日 発行

愛媛大学 沿岸環境科学研究センター

〒790-8577 愛媛県松山市文京町2-5

TEL : 089 - 927 - 8164 FAX : 089 - 927 - 8167

E-mail : kyoten1@stu.ehime-u.ac.jp

CMES : <http://www.ehime-u.ac.jp/~cmes/>